



# 大衆文学大系

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

13

下村悦夫  
邦枝完二  
木村毅

大衆文学大系 13 下村悦夫 邦枝完二 木村毅集

昭和四十七年五月八日 第一刷

著者 下村悦夫 邦枝完二 木村毅

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二十一 郵便番号 一一二  
電話東京(〇三)九四五一一二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

©下村麟太郎 国枝ひさ 木村毅 一九七二年  
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

下村悦夫集

悲願千人斬

五

邦枝完二集

お伝地獄

一六

お伝情史

四〇

木村毅集

旅順攻囲軍

五七

都々逸坊扇歌

七〇

年 解 解  
譜 題 說

三 三 三

下村悦夫集



# 非願千人斬

## 忽然と現われた魔神天狗!

ざざざあーッ……と大きく青嵐が吹き渡ると、辺りに繁っている雑木や薄が、其葉裏を夕暮の薄青い光の中に白く見せて、さながら波の崩れ乱れるように揉みあいざわめく。次第に暗くなる東の空には、一筋仄黄いろい暗鬱な雲が漂うていて、それが重たく動こうともせぬところを見ると、奈何やら今夜は雨になるらしい。こゝは美濃の国井之口は稲葉山城の奥まった裏庭である。

青嵐は、何か人間の目では見る事の出来ぬ巨大な神の呼吸の様に、時々ざざあーッ……と吹いて来ては、またぱたりと止んでしまう。そして、その止んだ間は実に静かで、吹き降

ろして来た時には白い葉裏を翻えしてざわめき立っていた草木も、ヒッそりと葉を垂れて、靈魂でもあるものゝ様に肅然として立ち並び、裏庭には宛然水底のような静けさが満ち渡ると、その静けさの中を、十五六人の荒くれ武士に取囲まれて、まだ前髪の匂やかな美少年が、愁然と面を垂れながら彼方の木戸から、こゝ裏庭に現われた。美少年は白綸子の袴を着て黄金拵えの細身の小刀を佩している、その立派やかな扮装といい、四辺を払うような打ち上った品格といい、この美少年は、どうも並並の武士の子供などでは無いらしい。そう云えば、彼を取巻いている武士共が彼を見る眼付きにも、可なりな敬意の籠っているのが見受けられる。

やがて、太い枝を張り拵げて鬱蒼と繁り聳えている巨大な楠の木の間から、先に立った年の頃五十恰好の武士が立止まって、その根がたに敷き並べられてある二枚の楯板に目を落した。そして、直ぐ後ろを振り返って、美少年にこう云った。

「太郎君、こゝが御最期の場所でお座りします。」

「左様か、大儀であった喃。」

美少年は鷹揚に領いて、楯板をチラリと見てこう云うと、静かに楯板の上に坐って、腰から小刀を鞘ぐるみ取り出して片側に差し置いた。と、今まで美少年を舞々と取囲んでいた武士どもは、その楯板のあるところから一間ばかりの間隔をおいて後ろに退って、美少年の一举一動を四方からじっと見守った。

この美少年の名は太郎と云って、当国美濃の太守として威武を四隣に張っていた土岐頼芸公の末の子である。それでは、その土岐の若君が、父の居城であるべきこゝ稲葉山城の裏庭で斬られねばならぬというのは、如何なる仔細であったらうか……? そこには、戦国の習いとは云え実に憐れな話が潜んでいた。

これより先き、当時天下に瀟漫していた下剋上の風潮は、美濃の国にも渦を巻いて、執権長井丹後守長弘は主君頼芸公を蔑ろに、恣いまくに専横を極めていたが、続いて彼の寵臣西村助九郎秀元が彼を毒殺して起つや、頼芸公に淫酒をすゝめて遂にこれを国の外に放逐し、其子を斬り、その妻妾を奪ひ、自ら斎藤の姓を冒して秀龍と名乗るに及んで、下剋上の風潮は遂にその極に達し、彼は己れの主君長井長弘が主君として奉じていた頼芸公に取って代って、美濃の太守に成り了した。

もと京都の卑しい油売り松並庄九郎から身を起して、今や先国主土岐家に代って諸臣に号令する身となった彼——秀龍は、非常に秀れた佞弁と邪智の持主であった。彼はこの二つの利器を揮って、主家横領の非道を行々と同時に、今まで同格或いは上格であった数多の老臣どもをも籠絡して、少しの不平すら云わせなかつた。そして、志を天下に懐いて、勢力の進展に苦心經營しているうちに月日は経って、その後幾年かの歳月が過ぎ去った——昨日のこと、氣に入りの老臣日根野備中守から「先君頼芸公の末子太郎君が今年拾五歳の春を迎えて近侍の者に時々元服の話などしていられるそうでお座るが、如何致してようお座るうか、鳥渡お耳に入れて置き申す」と、囁かれると、其当時愛妾から哀願されて殺す事を免して遣って其儘にして置いた——太郎君の幼な顔を思い浮べて、秀龍はギクリと戦慄した。そして、その白い眼を七首のように光らせるや、

「斬つてしまえ！」

と、烈しく云った。備中守は微笑しながら頭を下げた。斯くて、太郎君は哀れにもその首を刎ねられる事となったが、忠義な近侍の一人に依つて早くもそれを伝えられると、免れられぬところと観念した太郎君は、せめては武士の子らしき最期を遂げるために予に切腹をさせよ——と備中守の許迄云い送つたの

で、佞奸鬼の如く冷酷なる備中守も、それをまで許さぬという訳にはならず、渋々ながら承諾したので、太郎君は今日その邸から城内に移されて、半日を以て父の居城であった稲葉山の城に送つた後、こうしてこの裏庭に設けられた切腹の場に曳かれて来たのであった……。

話はまた前へ戻る。

覚悟を定めた太郎君は、愁いを含んだ眼で暫時城の方をじつと見ていたが、程無く、両肌を押し寛げると、右手に小刀を抜き放つて持ち、左手で腹を撫でながら、無言のまゝ先程の武士を見返つた。

すると、検死の役目を帯びているらしいその武士は、片側に控えていた部下の武士に向つて、敵そかな声で云つた。

「ソレ、御介錯！」

ハッと答えてその武士は立上つた。彼の手に抜き持たれた明皎たる白刃には、更に他の者に依つて切水が注ぎかけられた。水晶の珠のようにポト／＼と雫の滴れるその白刃を掲げながら、武士は、やおら太郎君の背後に廻つた。

と、この時、静まっていた青嵐が、又もや烈しくざざざいと山上から吹き降して来た。青嵐の吹きとおるところ、想像もつかぬ大蛇の鱗りゆく如くに草木は左右に押し靡き、揉に揉んで砕きざわめく。ざざざー……ざざあ……その青嵐の吹き捲くる中に、太郎君は寂しい微笑を頬に刻むと、愈々刀を逆手に持ちなおした。介錯の武士は太郎君の様子にじつと目を着けながら白刃を振り翳した。

あわや、小刀は太郎君の腹に突き立てられようとした。その一刹那、何処ともなく風を切つて飛んで来た礫が、介錯の武士の真額に発止的中だった。呀！ 武士は魂消る悲鳴と共にぱたりと後ろに倒れた。素破や曲者！ 検死役の武士を始め

一同の者は色を変えて総立ちに立上った。その途端、彼方の木蔭から疾風のように駆け寄った一個の人影！

「呀！ 天、天狗！」

素早く刀を抜き連ねて曲者を迎え撃とうとした武士どもは、瞬くうちに自分らの前に現われたその曲者の顔を見ると、慄ッとしたようにこう叫んだ。

満面朱を塗ったるが如く鼻高く口大きく、円らな両眼に宿る光は爛々として、思わずそこに立ち竦んだ武士らの面を射るよと見れば、その曲者はおうと叫んで、穂芒の如き刀の林に猛然と躍り込んだ。えい！ や！ 烈しい！ 矢声の起るところ、武士どもはその曲者のために片手掴みに投げ倒され蹴倒された。

「已れッ！」

検死の役人は必死の勇を振って斬込んだが、忽ち足を上げて脾腹を充かに蹴上げられ、嘔と叫んで悶絶した。と、曲者はそれを見返りもせず、降って湧いたようなこの騒ぎを呆然として眺めている太郎君の側に駆け寄るや、ものをも云わず軽々と太郎君を小脇に引ッ抱えて、何処ともなく青嵐の中を走り去った。その素早さ！ 宛然として電光の如く石火の如く、一呼吸もつかぬ束の間これほどの大事をば遣り遂げて去ったのである。

朱のように逞しい面に突兀として聳えた鼻！ 輝く金色の眼！ 彼は果して世に誦う天狗であったのだろうか……？

それは兎も角もとして、その曲者が太郎君を引ッ抱えて青嵐の中に見えなくなると——直ぐその後、楠の巨木の背後から密ッと姿を現わして、そこに悶絶している武士どもをジロリと見廻した者があつた。見上げるような大兵肥満の巨漢で、顔には般若の仮面を被っている。腰に天秤棒のような大刀を佩しているところを見ると、彼もまた武士であるらしい。

「うむ、これでよし！……」  
やがて、彼はこう独言つと、今は大分蒼暗くなった山の中へさっさと大跨に上つていった。

## 「仮面を返せ」と能師の狂乱

ところが、こんな不思議な騒ぎが裏庭で起つた——それより少し以前の事である。城内でも血腥い騒ぎが突発した。

……  
京都から遙々とこゝ稲葉山城に招かれて今日一日を晴れと舞つたお能師の葉桃左近は、夕暮となつて其日の最終の番組を舞つてしまうと、快よい興奮を感じながら、弟子達や雛子鳴物の人達と共に、自分らの控え処として老臣から与えられていた室へ戻つて来た。そこは、閑静な、そして可なりに広い離れ座敷であつた。左近は一同と一緒に茶を呑んで今日の芸の出来の良否を批評すると、まだ笑いさよめいている人達を後にして、昨日から自分の居間としていた続きの小座敷へ静かに入つた。そして、障子を明けて縁側へ立ち出でた。数寄を凝らした庭園が彼の目の前に展がった。

左近はその庭に咲き乱れている牡丹の花を少時じつと眺めていたが、やがて、片手に提げていた桐匣の箱の蓋を除つて、中から一つの仮面を取出した。それは見るも凄まじいような美事な出来栄の般若の仮面だつた。

「今日ほど一分の緩みもなく舞つた事は無い！ それというのも、全く此仮面のお蔭だわい……」

般若の仮面に見惚れながら、左近はこう呟いて莞爾した。

「その仮面を俺に貸せ！」

と、低くはあったが威圧の籠った声と共に、片側の植込の蔭からずいといと一個の人影が立ち現われた。吃驚して左近が見ると、雲突くような巨漢で、腰には四尺にも余る大刀を帯び、身軽に扱立って、顔には紺の覆面をしている——怪しき武士。

左近は手早く般若の仮面を桐箱の中に納いながら云った。

「何方かは存じませぬが、この仮面は私が寸時の間も身を離さぬ大切な品、どうぞ御容赦下さりませ。」

「えい、貸さぬと云っても借らないで措こうか！ 強っても貸さぬとあつては其方の為めにならぬぞ！」

低くはあるが武士の声には凄味が加わる。左近は顔いろを蒼くしながら、

「そ、それは御無体な！」

「何でもよい、その仮面を此方へ寄越せ！」

覆面の武士は縁に片足を掛けて、左近が袴と抱き擁えている仮面の箱に手を伸ばした。

「あッ、それは、余りに御非道な！」

「己れ、飽迄も寄越さぬな！ えいッ！」

鋭い気合と諸共に、武士の右手からは紫の電光が左近の肩をさして煙乎と走った、左近は抜打ちに肩先から胸元かけて斬り下げられて、声をも得立てず血煙の中に退け反った。

「馬鹿め！ 強情張らずに仮面を渡さば斯様な事にもならざつたに！ だが、この能師よりも、憎きは斎藤秀龍。故主の幼君の首を刎ねる傍ら、能狂言を催してこの稲葉山の城に飲菜の声を上ぐるとは、言語道断なる不敵の振舞！ 今に目に物見せて呉りようぞ！ 能師、其方はその血祭になったのじゃ、成仏せよ！」

怪しき武士はこう呟いて、仮面の箱を手に取り上げるや、縁

側から音もなくヒラリと飛んだ、かと思つと、その姿は早や庭園の樹立の中に紛れて消えた。

殆んどそれと同時に、隣りの室からドヤ／＼と弟子達や鳴物師達が入つて来た。彼らは左近がその居室に引込んでしまった後の気安さに、しまいには冗談も出る、色世話も出るといった工合で、笑いさんざめいていたところから、覆面の武士と左近との間に取交わされた問答など少しも耳に入らなかつたが、最後に左近が斬倒された物音を聞き附けると、怪しく思つて、一座の中の一人が、ツと立上ると、皆もその後から続いて立上つたのであつた。が、それほどの樁事が出来したとも思わずに来て見ると、この光景！ 左近は縁側へ両脚を投げ出して——その脚はまだヒク／＼と痙攣している——仰向けさまに倒れている。障子には紅葉のように血飛沫が散っている。余りの意外さに彼らは呀／＼と云つたなり、血潮に染まつて倒れている左近の周囲に立ち竦んだ。と、

「おッ。お父上！」

と、帛を裂くような叫びを上げて、一人の若者が駆け込むように入つて来た。それは、左近の伴の右近であつた。彼は能が果てると当城の主人斎藤秀龍の奥方三芳野の方の前に招かれたので、父の左近や一同の者よりこゝへ戻つて来るのが遅れたのであつた。

「お父上ッ、何者の手に掛けて此様に……」

右近は父の死骸に縋り付いて、涙をポロ／＼溢しながら、蒼ざめた父の死顔にじつと視入つた。併し、息の絶えた者がもの云おう筈は無い……。

「此様な、此様な——無惨な殺しようを……父上ッ、若し、父上！……」

右近は頻りに父の死骸を揺すぶりながら泣き口説いた。が、

そのうちに、父の左近がその片手に固く握っている紫の絹の打紐——それは先程覆面の武士が奪い去ったかの般若の仮面の箱に附けられていた紐であった——が目に着くと、なお一層驚愕したように立上って、床の間の方を振返った。そこには、一個の桐の箱——般若の仮面の箱と同じ形の——が置かれてあった。

右近は走り寄ってその箱を取上げた、箱の表面には、『朱阿弥作、天狗之仮面』と達筆に記されていた。右近は急いでその蓋を除くと、彼の口からは恐ろしい驚愕の聲が迸り出した。

「呀ッ、無い! 盗まれた! ……」

箱の中は空虚だった。あるべき筈の天狗の仮面は消えて失くなりでもしたかのように見当らなかつた。

「盗まれたのじゃ! ……盗まれたのじゃ!」

右近は急がしく室の中を見廻した、彼の目は、般若の仮面の入れられていた他の一つの箱を索めたのである。その箱の表面には矢張り天狗の仮面と同じように、『朱阿弥作、般若之仮面』と認められてあつて、兩つとも当代随一の仮面作りの名人朱阿弥の手になった名作中の名作で、左近の珍重すること限りなく、葉桃の家に伝うべき宝物じゃぞ——と日頃から俣の右近にも云つて、寸時の間も手許から放した事の無いくらい愛蔵していたものであつた。

それが箱ごと紛失している事が少時して右近に判ると、父の手に握りしめられていた紫の紐と、その箱の紛失——と、それに天狗の仮面の箱が空虚になっている事とを結びあわして、右近の頭には次のような考えが閃いた。

「お父上はその仮面盗人のために殺されたのじゃッ! そうじゃ! ……おッ! ……」

父であると同時に師匠である父親は、非業の刃に懸つて死んで了つた! 家の宝として孫子の末まで伝えよと云われていた

名作の仮面は兩つとも盗まれた! ……右近の頭はガク／＼鳴つた。彼の眼は血走つて来た。

「無い、無い、仮面が無い! ……兩つとも無い! お父上、若し、お父上!」

右近は再び父の死骸に犇とばかり取懸つた。

「お父上、誰が貴方をこんな惨い目に遭わせました? 何者が仮面を盗んでゆきました? え、若し、この私にお聞かせ下され! 私は貴方の仇を討ちます! 必ず仮面を取戻します! 誰が貴方を殺したのか、さ、早く云うて下され! お父上、お父上、黙つていなさらずに、若し、お父上! ……」

今は靈魂空に飛び去つてその目は空しく睜いたまゝ、その口は固く閉じたまゝである父左近をば揺すぶりながら、頻りに泣き口説く右近の哀れにも取乱した姿を見ると、弟子達や鳴物師達も頃には慰さめの言葉も出ず、たゞ愁然として其姿を見守つていた。が、糸が切れたようにその泣声がブツリと断れて、急にカラ／＼と上ずつた笑い声が右近の口から駆け出ると、彼らは吃驚してこの若師匠の蒼ざめた顔を見き込んだ。

「さ、お父上、二人で行つて仮面を取戻して参りましょう! 貴方を斬つた曲者を引捉えて参りましょう! さ! 何の、これしきの疵に! さあ、お立ちなされませ!」

右近はこう云つて、父の死骸を抱き起した。彼の血走つた目には焦々した白い光が宿っていた。その口は顔全体に暗い影をこしらえて止み間無しに大きく痙攣した。余りの悲嘆と驚愕とで気が狂つてしまったものらしい。右近は父の死骸を抱き起さうとして、死骸の重みに引かれてその上に倒れかゝつた。

「あッ、若師匠!」

弟子達は慄ッとしながら、右近をば抱き起した。が、右近はハラ／＼と涙を落すと、自分を起して呉れた弟子に向つて、

「父を返せ！ 仮面を返せえ！」

と、叫んで武者振り附いた。倒れた拍子に父の肩を染めていた血汐が着いて半面が真赤に染まった物凄いな右近の顔——それを唐突に差附けられたその弟子は、キャッと云って手を放して、他の男の背後に隠れた。

「気が狂れた、気が狂れた、若師匠は気が狂れたぞ！」

弟子達が唇の色を蒼くしながら思わず次ぎの室へ逃腰になると、右近はそれには見向きもやらず、煌々と底光りのする眼をば空に据えて、縁側から蹠跟と庭に降りた。

「仮面を返せえ……父を返せえ……」

血に泣くような声で叫びながら、右近はフラ／＼と歩き出した。何処へゆくのか、そんな目当などがある筈は無い。だから、放擲して置いては奈何な事になるやも判らぬので、二三人の弟子達は恐々ながらその後を追い掛ける……

## 駕籠の中の大和尚

以上のような事があってから、裏庭であの不思議な騒ぎが持ち上ったのである。

——さて、話はまた以前に戻って、かの般若の仮面を被った怪しき武士が「うむ、これでよし」と独言を言って何処ともなく立去ってから暫時すると、投げ倒され蹴倒されて悉く気絶して居った武士の中の一人が、うゝんと唸って息を吹き返した。彼はパチリと目を明いて、不思議相に四辺をば見廻した。そして、上役を初め同僚のものが叩きつけられた蛙のようにへたばっているのが目に入ると、彼の頭の中には先程の恐ろしかっ

たあの光景が光のように思い浮んだ。

「暗い青嵐に乗って忽然と姿を現わしたあの魔神！ キラ／＼光る眼と高い鼻を持った真赤な面のあの天狗——そ、そうだ……」

底知れぬ恐怖の念が彼の全身を冷たくした。喚ッ！ 悲鳴を上げて彼は城内へ馳け込んだ。

日根野備中守はその武士の注進を聞くと、颯と顔色を変えて、それは一大事じゃ！ と眩いたが、何か思うところがあつたものか「城内の木戸という木戸、門という門は全部閉めて、此方から沙汰のあるまではお能拜見の客人を帰す事は相成らんぞ」と、配下の者に云附けると、直ちに三十余人の勇士を引き連れて裏庭へと馳け付けた。

「む、何たる醜態じゃ?！」

算を乱して打ち倒れている武士どもの姿を眺めると、備中守は不快げに眉を蹙めた。活を入れられたり水を吞まされたりして、武士どもはやがて失神から甦った。が、最初に礫に中って退け反った——かの介錯の武士だけは、到々息を吹き返さなかつた。その額は栴榴のように弾け割れて、血が蚯蚓の這っているように鼻柱を伝わって頤の方へタラ／＼と流れていた。

武士どもは、気が着いてみると、自分らの周囲には家中の者が敵めしく武装して立ち竝んでいるので、鳥渡不審げに虚途虚途とその様子を眺めたが、程なく此場の仔細が会得いくと、一同面目無げに差俯向いた。「西川、これは何とした事じゃ?」備中守は検死役の武士に向って咎めるようにこう云った。すると、西川と呼ばれた武士は備中守をチラと仰いだが又もや深く頭を垂れて、

「御重役、まことに面目次第もお座りませぬ。お聞き下され、実は斯様な訳でお座って——」

と、先程の委細をば落ちもなく語った上、  
 「君子は怪力乱神を説かずとか申しまするが、世に謂う天狗魔神とは実にあれをさして云うのかとこの西川兵左衛門生れて以来初めての恐ろしさを——」

「えい、黙らっしゃい！」

じつと聞いていた備中守は、兵左衛門の言葉を打消すように大喝した。

「そのような魔神がこの稲葉山に棲んで居よう筈は無い！ 縦や飯え棲んでいようと、人間界に姿を現わそう筈は無い！ 必ず何者か仮に天狗に姿を扮して貴殿らの目を晦したに相違あるまい。如何に夕暮とは云え、それを看破する事出来ずして、何処までも魔神なりと信ずるなどは迂闊千万！ いや、それよりも、その曲者に太郎君を奪い去られたは、何物にも代え難き大失態じゃ！ 幼き虎を野に放ちたるも同様なれば、後年に到つて斎藤の御家に如何なる禍いをなすやも図り知れぬ。この事お耳に入った時の御主君のお怒りを恐察すると、備中守は胸が顫える！ 西川、我々は腹切つてお詫をせねばなるまいぞ。」  
 と、憤怒と当惑とで燃えている眼を備中守はヒタと兵左衛門の面に据えて、

「何という困つた事になつたものじゃ！ 西川、帰宅して切腹されい！ 此方も腹を切る！」

「はッ……で、ではお座るが御重役。」

と、兵左衛門はおず／＼と顔を上げて、

「何を申すも天狗魔神の仕業でお座れば、太郎君の御身もよもや安全に助かるといふような事には参るまいし、それに——」

「えい、まだ左様な事を云いおるか！ その曲者は断じて天狗ではない！ 先刻城内に於いて能師左近を斬殺してその秘蔵する仮面を盗み去りし曲者があつたとの事なれば、その曲者こそ

は太郎君を奪いゆきし曲者に相違無きこと火を見るよりも明らかじゃ！ 左様な戯けた事を申さず御主君へのお申訳に帰宅して腹を切られえ！」

「はッ……そ、それでは、御重役！」

蒼くなって兵左衛門は頭を垂れた。

「おうさ、この備中守とて同様じゃ。」

苦々しげにこう云い捨て、備中守は衝と大櫓の側を離れたあとは、大風の吹いた後のような静かさ寂しさの中に、兵左衛門の組下の者らが、彼の周囲に摺り寄つて、如何にも気の毒そうに言葉もなく彼の顔を見守つた。

此方は日根野備中守。

西川兵左衛門に切腹を勧めておいて城内に立ち帰ると、お能拜見の客人に向つてゆる／＼と御帰宅あるように——と、配下の者をして云わしめると同時に、大手の正門だけを開かせて、自ら先程の勇士三十余人を従えて門の内側に立ち並んだ。彼には何か考へた事があるらしかつた。とその中に、今日のお能に招かれた客人達が静かに玄関を下りて門の方へ退出して来た。多くは斎藤家の重臣共であつたが、その中には十三四人の郷土や町人も交つていた。それは、いざ戦いという場合に軍用金の調達その他色んな事を容易くするための政策の一つとして、その心を収斂すべく特に招き寄せられた国内の金満家どもであつた。

第一番に、二十余人の家臣を従えて備中守の前を馬上で通りかゝつたのは、当家の軍師としてその智略を遠国にまで唄われている——菩提の城主竹中半兵衛重治であつた。彼はもの／＼しい備中守らの様子を見ると、ニツと微笑して、

「備中どの、何かお座るかの？」

「む、少々不審な事がお座るに依つて——」

「左様か、それは御苦労。ようせられい。」

二三言、言葉を交すと、半兵衛重治の一行は門外へ出ていた。備中守の目は重治の従士らの顔に注意深く光ったが、別に怪しいものも発見しなかつたと見えて、彼は己れの背後に立ち並んでいる勇士どもを振り返りもしなかつた。やがて、第二番には、清水の城主稲葉伊予守貞通。第三番には鶴沼の城主大沢治郎左衛門信行。第四番には、当国で名代の大金持山城屋万右衛門。続いて中屋八郎兵衛——と云った工合に、馬上或は駕籠で続々と退出し来る。その都度、備中守の目はその人達の乗っている駕籠に光り、供人らの顔に光る。彼は、天狗に奪い去られたという太郎君をその中から見附け出そうとしているのだ。が、太郎君は見附からない。

と、そのうちに、立派な駕籠が静々と備中守の前を過ぎ去るうとした。

「待たれい。何方でお座るな？」

「安国寺の住職白雲上人で御座る。」

と、駕籠の左右に随いていた若侍の一人が備中守の問いに答えてこう云った。安国寺というのはこの井之口の城下外れ池田ノ荘にあつて、畏れ多くも今上の帝の勅願所となつている名刹である。そして、その住職白雲上人は幼名を稲葉三郎通康と云つて、土岐家の老臣としてその名望群臣を圧していたかの稲葉伊予守通兼入道塩麿の第三子。今は美濃三人衆の随一人と唄われて斎藤家に重きをなしている稲葉貞通の叔父であつて、仏門に入らぬ前には其勇名を遠近に馳せたものだが、先住雲谷上人の弟子となつて落飾するや、猛虎一変して羊となつたように温順となり、学を修め徳を磨く事多年、遂に師匠の後を襲つた天晴れの名智識であつた。

「うむ、白雲上人なれば、土岐の家に因縁がないとは云えぬ。」

こう思った備中守は、一応駕籠の中を改めて見ようとして歩み寄ると、その途端、駕籠の戸が六分通りスラリと明いて、熟した聚のような血色のいい白雲上人の大きな顔が現われて莞爾と笑つた。

「おゝ、これは日根野殿。」

「上人、失礼ながら些と取調べたき儀がお座つて——御免。」

備中守は駕籠の中を差覗いた。と、白雲上人は備中守の顔を見上げ乍ら、また莞爾として云つた。

「それは大儀。さあ熟く見さつしやれ。」

併し巖のような上人の背中の方は、上人が少しも身体を動かして呉れぬので篤とは見えない。けれども、勅願所の住職ともあるう名僧に向かつて迂闊に疑いを掛けるような——これ以上のことをする訳にはゆかぬ。それに、怪しい廉も見当らなかつたので、間もなく備中守は失礼を詫びて駕籠の側から立ち離れた。と、駕籠は爾々と門外へ出ていった。

遂に客という客は悉く退出した。が、その中から太郎君を発見する事は出来なかつた。とすると、太郎君は今日お能拝見に来て居つた者の手には助け出されたのでは無いという事になる。

「はてな？ それでは愈々正真正銘の天狗魔神に引渡されていったのであろうか……？」

備中守は不審の首を傾むけた。

## 天狗の仮面の曲者こそ父の仇敵！

日がずつぷり暮れて、稲葉山の峰に黄金の鎌のような月が出

た。その仄かな光の中を西川兵左衛門は幽霊のようにとぼとぼと自分の邸に帰って来た。

「まあ、旦那さま！」

出迎えた妻のお崎は、良人の顔が、この世の人とも思えぬほど真蒼なので、驚ろいてこう叫んだ。と、兵左衛門は沈んだ目で妻を見て、

「後刻で話す事がある。が、手を拍らすまでは拙者の居室へ来てはならぬぞ。」

と、云い置いて、自分の居室へ入って間の唐紙を静かに閉めた。

「……あゝ……」

兵左衛門は蹠蹠と崩れるように机に凭れ掛った。重たい息が肩を顫わして後から後からと続て出て来る。兵左衛門は力の無い目で室内の一とこを熟々と視詰めた。

「例え、あの曲者が、天魔にせよ鬼神であつたにせよ、太郎君を奪い去られた責任は此兵左衛門としても避ける事は出来ぬ。

況してや、御老臣の仰せの通り、あの曲者が天狗の仮面を被つた者であつたとすればなおくの事。主君への御申訳に拙者は腹を切らねばならぬ。備中守殿も同じく切腹されると仰せられたが、拙者としては己れの失策からあの御仁を死なせた義理では無い。この申訳は飽迄も拙者一人でせねばならぬ……」

こんな風に兵左衛門は考えた。温厚にして篤実、さほど格式のよい武士ではなかつたけれど日頃より家中一般から好感を持たれていた兵左衛門は、こうした場合にも、己れを頭から叱り附けた備中守を怨まずして、却つて身に代えてこの冷酷な老臣を救おうとするのであつた。

が、彼とても人間である。こんな事から奈何しても死なねばならぬかと思うと、その死因を造つた——太郎君を奪い去つた

曲者が怨めしく憎かつた。兵左衛門の目からはホロリと涙の玉が落ちた。やがて彼は筆をとつて手紙をば書き出した。二通の手紙が出来上つた。一通は主君齋藤秀龍へ——己れの失策を詫びた上、備中守への恩命を願つたもの。一通は上役たる日根野備中守へ——太郎君を盗み去られし責任を負つて拙者はここに切腹致すが、貴殿には御家の重臣、拙者と同じには論じること出来ぬ御身分であるから、何卒生永らえて君家の為めに尽して下さるよう——と認めたものであつた。その手紙を兵左衛門は沁々と読み返して封をすと、片手でまた涙を拭つて、

「これでよからう。この手紙をお読み下さつたりや、御主君も備中守殿もこの上拙者をお責めはなさらないじゃらう……」

と、呟いた。そして、愁然として暫時燈火に視入つていたが、間もなく、切腹の支度をして、仏壇の前に坐つた。

「これ、お崎、軍太郎お類の二人も伴れて早く来い。」

兵左衛門は手を拍らして妻子の者を呼んだ。良人が戻つて来た時のたゞならぬ顔いろから推して何か大きな変事でも起つたのではあるまいか——と、ひとり心配していた妻のお崎は、良人の声が耳に入ると、直ちに二人の子と共に馳けるようにして良人の居室へ入つて来た。パタパタと入つて来た妻子の者は、呀々と云つてそこに立ち竦んだ。腹を切るべき用意をして小刀を右手に取上げてゐる兵左衛門の蒼い顔が静かに彼らを見上げたからである。と、その顔は寂しく笑つて、

「おゝ、来たか、これへ坐れ。」

「……………」

お崎は、顫えながら言葉も無く良人の前に腰を下した。二人の子供も、父親の様子を見守りながら母の側に坐つた。

「突然この様子を見ては其方達が吃驚するのも無理はない。

が、拙者は奈何あつても死なねばならぬのじゃ。」

肩を並べて声も無い妻子の者を見廻しながら、兵左衛門は噎れた声でこう云つて、また、寂しく微笑して、

「その訳を話して置くから、拙者の遺言と思つて黙々耳に止めておいて呉れ。軍太郎は十八、お類は十四、もう小児といふでもないから拙者の云う事も了解るであらう。お崎は云う迄も無い事じゃが、其方達兄妹も、今この父が云い残す事を肝に銘じて忘れるなよ……訳と云うは、本日重役日根野殿より土岐家の若君太郎君に詰腹を切らせ参らせるに就いてその検死をば仰せ付かつて——」

と、兵左衛門は城内裏庭に於ける怪事件を落ちも無く物語つた上、その責任を負つて切腹するのだから決して未練に留立てするではない——と云い終つて、今は涙の干いた目で再び妻子の者を見廻すや、

「さらばじゃ、無事で暮せよ！」

と云いも果てず、兵左衛門の手には小刀が煌々と光った。

「あッ、旦那様！」

お崎が泣声を上げてその手に取纏る間もなかった、小刀は早くも脇腹にぐざと突き立てられて、パッとお崎の頬に血汐が掛つた。

「お父上！」

「お父様！」

軍太郎とお類は左右から父の肩に跨つと纏つた。兵左衛門は火を呑むような苦痛をばギリ／＼と歯を食い縛つて耐えながら、血走る眼でじつと軍太郎の顔を見た。

「お父上！……」

「お、おう……軍太郎……」

「御無念は必ずお晴し申しまする！」

「おッ、よ、よく云うた！ 怨めしきはあの天狗の仮面を被りし曲者！ あの者さえ無かつたりや斯様な事にはなるまいものを……」

兵左衛門はハッ／＼と炎のような息を吐きながら、片手に軍太郎の手を固く握つて、

「父の仇敵はあの曲者じゃ！ 探し出して我が怨みを返して呉れ！ それに……それに今一つは、あの曲者が奪い去りし太郎君——あの若君の行方を突止めて、首にしてよもよい、日根野殿に渡して欲しいのじゃ！ よ、よいか……」

「了解りました！ 例えこの身を粉に砕いてなりとも御遺言は果しまする！」

「頼む……頼むぞ……軍太郎……この二つの事を果すは父へ孝、君へ忠——武士の子としてせねばならぬ——こと……こと……」

兵左衛門の声は糸の様に細くなつた。軍太郎の手を握り緊めている手は、段々と力が無くなり、追々冷たくなって来る。

「お父上……お父上……お気を確かに——」

軍太郎は泣きながら父の耳に口をあて、こう呼び立てると、妹を振返つて、

「お類、水を！ 早く水を持って来い！」

「……………」

妹のお類は袂で顔を抑えながら立上つて台所に走つていった。

「天、天狗の仮面を被つた曲者！ ……天狗の仮面！ ……天狗の仮面！ ……天狗の！ ……」

兵左衛門の口からは呪うような呻きが洩れたが、最後の言葉がすーッと噎れて、ハッと思ふ間にふつりと断れると、ガックリと頭を垂れた。それを背後から抱き止め乍、軍太郎はお類を